

令和6年度全国学力・学習状況調査 結果の概要

女川町立女川小学校

1 調査の目的

- (1) 義務教育の機会均等とその水準を維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 改善の取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 学校における児童への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。

2 調査実施月日

令和6年4月18日(木)

3 対象学年

女川小学校第6学年児童 32名
当日実施児童 32名

4 調査事項及び内容

- (1) 教科に関する調査：国語、算数
- (2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査

5 本校と県・全国との比較

	宮城県との比較	全国との比較
本校の国語	やや上回っている(△)	同程度
本校の算数	やや下回っている(▼)	下回っている(▼)

6 学力調査結果から

(1) 国語の成果・課題と指導改善のポイント

① 調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・観点別に見ると、「知識及び技能」が高く、全体で全国平均を約4ポイント上回っていた。問題数で見ると、「知識及び技能」に関する全6問中4問が全国平均を上回っていた。特に、「漢字に書き直す」「主語を見つける」といった言語に関する問題は、全国平均を大きく上回っていた。
- ・「思考力、判断力、表現力等」においては、「読むこと」が全国平均と同程度であった。中でも、「物語を読んで心に残ったところとその理由を書く」記述式の問題では、全国平均を大きく上回った。
- ・無回答率が非常に低く、無回答があったのは2名の計3問のみ(1名：2問、1名：1問)であった。

(課題)

- ・観点別に見ると、「思考力、判断力、表現力等」は、全国平均を下回っていた。問題数で見ると、「思考力、判断力、表現力等」に関する全8問中7問が全国平均以下の正答率であった。中でも、「話すこと・聞くこと」に関しては、全国平均をかなり下回っていた。
- ・「話すこと・聞くこと」に関しては、「伝える内容を考える」「伝え方を工夫する」という問題で

特に課題が見られ、全国平均を大きく下回った。

②指導改善のポイント

- ・「知識及び技能」における漢字指導については、これまでどおり、反復して取り組み定着させることを継続する。また、教科書の本文に出た言葉を辞書で調べる活動などを取り入れ、児童の語彙を増やしていく必要がある。
- ・「読むこと」「話すこと・聞くこと」の問題については、文章や相手の発言から中心となる言葉を読み取る力を身に付ける必要がある。中心となる言葉を丸で囲んだり、関連する言葉を線でつなげたりすることを、普段の学習から意識的に取り組ませる。また、業前の「読書タイム」の実施回数を昨年度よりも増やすことで、児童の本を読む習慣を身に付けさせたいと考える。
- ・「記述式」の問題については、自分の考えを文章にまとめて相手に伝えたり、提示された条件に合わせて文章を書いたりする力を身に付けさせる必要がある。そのために、提示された条件に従って短作文を書く活動や、書いた文章を互いに推敲し合う活動に取り組ませる。自分の考えを文章にまとめる力や相手に伝える力が向上することで、解答に自信が持てるようになり、無解答率の改善につながると考える。

③質問紙から

- ・「国語の学習が好きか」という質問に肯定的な回答をした児童は60%であり、全国平均、宮城県平均をやや下回った。「国語の勉強は大切だと思うか」という質問に肯定的に回答した児童は90%近いものの、全国平均、宮城県平均を下回っていた。指導方法を工夫したり、実際の生活場面との関連付けを図ったりするなどして、国語の学習に対する意識を高めていく必要がある。
- ・「国語の授業の内容がよく分かるか」という質問に肯定的な回答をした児童は約90%で、全国平均、宮城県平均と同程度であった。国語の「書くこと」や「読むこと」に関する質問への肯定的な回答は90%を超え、全国平均、宮城県平均を上回っていた。一方「話すこと・聞くこと」に関する質問への肯定的な回答は80%程度で、全国平均はやや上回ったものの、宮城県平均は下回っていた。この結果が、「話すこと・聞くこと」の設問に対する正答率に反映していると考えられる。

(2) 算数の成果・課題と指導改善のポイント

①調査結果から明らかになった成果・課題等

(成果)

- ・領域別に見ると、「変化と関係」が宮城県平均をやや上回っていた。(全国平均はやや下回っていた。)問題数で見ると、「変化と関係」では、3問中2問が県平均を上回っていた。そのうち1問は、全国平均も上回っていた。
- ・「数と計算」「データの活用」の問題で、宮城県平均を大きく上回り、全国平均をかなり上回った問題があった。これは、題意を正しく読み取れば、平易な計算で答えを求められる問題であった。国語の読み取る力が正答率の高さにつながったと考えられる。
- ・無回答が1問もなかった。

(課題)

- ・観点別に見ると、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」どちらも、全国平均を下回っていた。特に「知識及び技能」は、全国平均を大きく下回った。
- ・領域別に見ると、すべての領域で全国平均以下の正答率であった。特に「図形」は、全国平均を大きく下回った。
- ・「数と計算」の「小数のわり算」に関する2つの問題の正答率が特に低く、どちらも全国平均を大きく下回った。
- ・記述式の問題では、正答率が全国平均以上の問題もあったが、「2つの側面からの説明が必要だが、1つの側面からの説明のみであった」という誤答が多く見られた。

②指導改善のポイント

- ・中学年で学習した数量の変わり方や三角形の性質など、内容が定着できていない。該当学年に立ち返って復習させたり算数コーナーを充実させたりするなどして、単元の学習に入る前に、前提となる知識を定着させることが必要である。
- ・「記述式」の問題について、国語と同様に、自分の考えを文章にまとめて相手に伝えたり、提示された条件に合わせて文章を書いたりする力を身に付けさせる必要がある。様々な形式の問題に取り組ませることで、指定された形式での解答ができるように書く力を高めていきたい。
- ・自分の考えを説明する力を向上させるために、友達に自分の考えについて話す活動を取り入れていきたい。解答が明白な問題について互いに説明し合うなどの活動が効果的であると考えられる。ただ考えたことを話すのではなく、相手意識を持たせ、自分の考えがしっかりと伝わるような説明をしていくことも積み重ねて指導を行っていく必要がある。

③質問紙から

- ・「算数の勉強が好き」という質問に肯定的な回答は約55%、「算数の授業内容はよく分かる」という質問に肯定的な回答は約65%で、いずれも全国平均を下回った。児童が「分かった」「できた」と実感できるような授業づくりを通して、児童の算数の学習に対する意識を高めていく必要がある。
- ・「問題の解き方が分からないとき、あきらめずにいろいろな方法を考える」という質問に肯定的な回答が約75%で、全国平均を下回った。また、「別な解き方を考えようとしている」という質問に肯定的な回答は、全国平均と同程度であったが、約60%と低い数値であった。算数の授業の中で、様々な解き方、考え方に触れさせたり、経験させたりしていく必要がある。

7 児童質問紙調査結果から (○成果、▲課題)

(1) 生活習慣・学習習慣について

- 約90%の児童が「朝食を食べる」「毎日同じ時間に寝る・起きる」といった基本的な生活習慣を身に付けている。
- 「携帯等の使い方について家の人との約束を守っている」という質問に肯定的な回答が約80%で、宮城県平均を大きく上回った。「うみねこルール」の取組の成果と考えられる。
- ▲平日に1時間以上家庭学習をする児童は約35%、休日に2時間以上家庭学習をする児童は15%で、いずれも全国平均、宮城県平均を下回っている。

(2) 規範意識・自己有用感について

- ほぼ全ての児童が「いじめは、どんな理由があってもいけないことである」と理解することが

できている。

○90%以上の児童が「将来の夢や目標を持っている」と回答し、全国平均、宮城県平均を大きく上回った。

○学習に関する「友達との話し合いを通して、考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができるか」「学習した内容を見直し、次の学習につなげることができるか」「授業で学んだことを生活に生かすことができるか」の質問において、いずれも肯定的な回答が90%を超えていた。また、「友達の考えを大切にしながら課題の解決に取り組んでいるか」の質問に対しては、すべての児童が肯定的な回答をしていた。多くの児童が、自己の学習や友達との学習を肯定的に捉えていることが分かる。

▲「自分にはよいところがある」と、自信をもって回答している児童は約30%で、全国平均を大きく下回っている。

▲「自分で学び方を考え、工夫している」と回答した児童は約70%で、全国平均、宮城県平均を大きく下回っている。

8 今後の取組

(1) 「基礎的・基本的な知識・技能」の確実な定着を図る授業等の改善

①児童が「何が分かったか」「何ができるようになったか」を実感できる学習指導の充実

- ・宮城県教育委員会から示されている「子供の学びを支援する5つの提言」を引き続き、全学級で確実に取り入れることにより、児童の自己有用感を高めたり、基礎学力の定着を図ったりする。特に、授業のねらいを明確にするとともに、授業の終末の適用問題や振り返りの時間を充実させることで、協働的な学びでインプットしたことを整理し、アウトプットさせることで学習を見直させていく。
- ・算数科の学習における授業形態（女川スタイル）を日々の指導で実践していくことで、適用問題に取り組む十分な時間を確保したり、協働的に課題に取り組むことができる授業を展開したりしていくことで、児童一人一人が分かったと実感できるようにしていく。
- ・校内研究において教師の指導力の向上を図るとともに、児童の目指す姿の共通理解を図り、教職員が一丸となって学力の向上に取り組む。

②個に応じた学習指導の充実

- ・タブレット端末やA I型学習教材（キュービナ）を活用し、繰り返し学習に取り組ませたり、下の学年に遡って学習に取り組ませたりするなど、個に応じた学習を充実させる。
- ・コース別学習、T・T指導、取り出し指導などを、学習内容の定着の実態に応じて実施する。

(2) 学びの土台となる望ましい生活習慣・学習習慣の形成

①基本的な生活習慣の確立

- ・生活習慣の改善を図るために「うみねこルール」（基本的な生活習慣を身に付けさせるため、児童会で定めた約束事）を全校児童で常時意識させるとともに、情報モラル教室など外部講師による親子学習会を行うなど家庭に対しても働き掛けていく。
- ・「スマイルタイム」（健康や生活習慣を確立するために、養護教諭が中心となって指導にあたる時間）を毎月設け、児童の基本的な生活習慣を確立させるとともに、その様子を保健だ

よりや学校ホームページで発信し、家庭に対しても啓発していく。

②自己有用感の涵養

- ・「キャリアパスポート」を活用し、自分の得意なことや夢について自己認知する機会を設けるとともに、各学校行事などにおいて児童の成長を認め、励ますことを通して、児童の自己有用感を高めていく。
- ・女川生活実学（総合的な学習の時間との関連）の中で、職場体験学習や校外学習などの、勤労観や社会性を養う体験活動を充実させる。
- ・高学年では、学校の中心として委員会活動や縦割り活動、各学校行事などにおいて活躍する場を設定し、保護者、教職員、地域の方々から認められ、褒められるような機会を設ける。

③家庭学習習慣の定着

- ・家庭学習の内容は、授業と関連付け、予習的な課題や復習的な課題、活用的な課題など児童の実態や、単元の進捗状況などを踏まえたものとする。
- ・家庭学習においても個に応じたものとするために、タブレット端末やAI型学習教材（キュービナ）を活用しながら、自分の興味のある内容や苦手としている内容など、児童が自分で選択して取り組むことのできる課題を設定する。

(3) 女川中学校、女川向学館、地域との連携強化

①中学校との連携

- ・校内研究の主題を共通のものとするすることで、9年間を見通した指導を行う。
- ・小中教科部会を行い、学習状況やその他の情報交換を行うことで各教科の指導における9年間のシラバスを活用し、系統立てて指導する。
- ・中学校での学習にスムーズに取り組めるように、小学校への乗り入れ指導を行う。

②女川向学館との連携

- ・本校では、高学年において主に算数科の補充学習を月1～2回程度行う。その時間に女川向学館の職員に来校していただき、学習支援を行う。
- ・女川町教育委員会生涯学習係が運営している「おながわ放課後楽校」において、各学年の担任と情報交換を行い、補充学習を中心とした学習支援を行う。
- ・各種検定において、女川向学館に実施協力を得て、検定取得機会の確保と学習意欲の向上につなげる。

③地域人材の活用

- ・女川町教育委員会生涯学習係で作成した「女川小学校版人材バンク」や「出前授業」を活用することにより、地域の教育力を生かす。
- ・女川町教育委員会生涯学習係との連携を深めて「家読の日」の啓発を行うことで、読書をしたり新聞を読んだりすることを習慣化させ、「読解力」を身に付けさせる手立てとする。